

## 「ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ」を聞いて

写真家福島あつしさんの講演は、同様に弁当を届けている私にとり、興味深い内容でした。聞き終えた瞬間、血が踊る思いで拍手していました。「暗い」、「汚い」、「臭い」という印象がある独居老人宅へ福島さん自身が弁当を届ける傍ら、その生活のままの老人達を23歳から33歳迄の10年間写真を撮り続けました。38歳の時この写真集で受賞という荣誉に至るわけですが、その道程は平坦ではなかった様です。当初は撮る側と撮られる側との距離が埋まらず、型通りの映像で苦闘されたとの事でした。映像が劇的に変わり始めたのは30歳からとか。一人ひとりの表情が「自然で、ありのままに」「同じ目線で寄り添う姿」が見事に表現され、福島さんの「豊かな感性」が発揮されます。

今年41歳、旅する写真家福島あつしさんに熱いエールを送り続けたいと思います。

(えんの食卓／胡桃沢進)

福島さんは高齢者弁当の配達として、足かけ10年に渡り働いてきました。そしてプロの写真家でもあります。この写真集刊行にあたり、独居老人らに対しての福島さん自身の心の動きや葛藤を話してくださいました。

配食先の老人達の中には、すさまじく不衛生な中での生活や、においのある中でも、どうしようもなく暮らしている方もおり、福島さんはその現状にまず驚かされます。このような老人達をはたしてカメラに収めて良いのだろうか、そしてそれを世間に出しても良いのだろうか、悩みます。長い葛藤の後、今日一日を前向きに生きようとしている老人達に気づき、又、彼らに敬意を払っている自分に気づいた時、胸のつかえを下ろし、写真集を自分の目線で刊行することができたそうです。

ここ暮らしネット・えんでも同様のサービスを現在154人の単身老者を含む高齢者に行っています。配食担当は一人ひとりとしっかり目を合わせて会話をし、今日の健康を確認して弁当をお渡ししています。そこには平和があり、弁当という糧と同時に命がかよっています。このやさしい目線と受け入れようとする心は、えんで働くどの職員にも共通しているように思います。

この写真集を通してたくさんの方が何かを気づくきっかけになればと願います。

(えんの食卓／河野秋子)